

## 巻頭エッセイ

### ついに念願の「夢」が叶う!?



浜村宏光  
新潟原動機株式会社  
代表取締役会長

「あなたはどんな業務を担当したいのかね?」と質問され、「船の基本設計を担当したいと思っております。特殊船の設計などに興味があります」と答えたことを今でも鮮明に覚えている。私が、石川島播磨重工業株式会社（現在の株式会社IHI）の採用面接を受けた昭和51年のことである。

採用確定後、人事担当から「君は、工場の現場に向いているようなので」と造船工場への配属となった。半年間、造船所内の全職場での現場実習を経験することとなり、造船所内では多くの「コワイ」職班長や「腕に自信のある職人さん」達に出会うことになる。このことで造船現場を肌で感じ、また自分が何一つ造船業で役に立てないことに気づき、採用面接の際に生意気にも「基本設計を担当したい」などと言ってしまったことを後悔した。

正式配属後は、艀装の担当スタッフとして現場を走り回る毎日が続いた。結果的に、実習時お世話になった「コワイ」職班長に様々な場面で助けていただくことになり、現場のプロ集団の「カッコ良さ」には脱帽するばかりであった。

担当スタッフとして職場にも馴染みかけた三年目の春、いきなり陸上部門への異動を命じられた。「オイルショック」による造船不況下での配置転換であった。全く畑違いで、そのころ繁忙を極めていた陸上プラントの土木建築設計部門であった。学生時代からの「夢」から離れてしまうという戸惑いはあったが、造船も土木建築も同じ建設系の技術分野だと覚悟して土木建築を一から勉強した。

時間の経過とともに、新しい職場での仕事の進め方や自分の役割について様々な場面で悩みや疑問を持つようになった。その後もプラントの土木建築屋

としてセメント、製鉄、環境プラント等様々な製品分野との関わりを持ち、さらに管理部門、調達部門等、転々と職場を異動していった。

しかし、どのような状況下でも迷いや疑問を解決してくれたのは、造船現場での体験であったといっても過言ではない。最前線の現場で本音の議論が出来れば「コワイ」職班長も納得し協力してくれることを経験し、また難問題を解決してくれる「プロ」は必ず存在するとの確信を持たれたからである。

私にとっての「造船業」とは、様々な技術領域を受け入れるという懐の深さ、プロの職人氣質、それを支えるコミュニケーション能力の重要性が魅力である。多分それが、様々な部門への異動も常に前向きに捉えることが出来た原動力に違いない。

本年6月、私はIHIを退社し、新潟原動機会長に就任した。ついに憧れていた造船業界に再び関わるチャンスに巡り合えたのである。長いブランクはあったが、造船の魅力を大いに楽しみ、深めたいと思っている。

大学においても「造船学科」という名称を聞かなくなつて久しいが、私のように「造船業」に憧れた世代にとっては寂しい限りである。

60歳を越えて再び憧れの業界に携わる私にとってみれば、製造業で言われる「設計に始まり、設計に終わる」という言葉も「造船に始まり、造船に終わる」と読み替えたいくらいである。

最近、日本でもクルーズが注目を浴びている。日本人にはあまり馴染みのなかった客船の旅である。今こそ「造船大国日本」を名実ともに取り戻す時ではないかと期待している。